

# 読書

「美濃明細記」は、美濃国全体を収録対象とした最初の地誌である。江戸時代の美濃は東西交通の要所ではあったが、中小の藩や尾張藩領、幕府領に分割して支配され、国全体の地誌が編まれない状況にあった。

あつたものを、後に「美濃明細記」と改めたことが緒言に記されている。また「茂茂久岐称」と表記するものもある。

写本は二系統のものが伝わり、伊東実臣の名と文久三年の号がある十一巻本と、後に手が加えら

## 県図書館に行こう

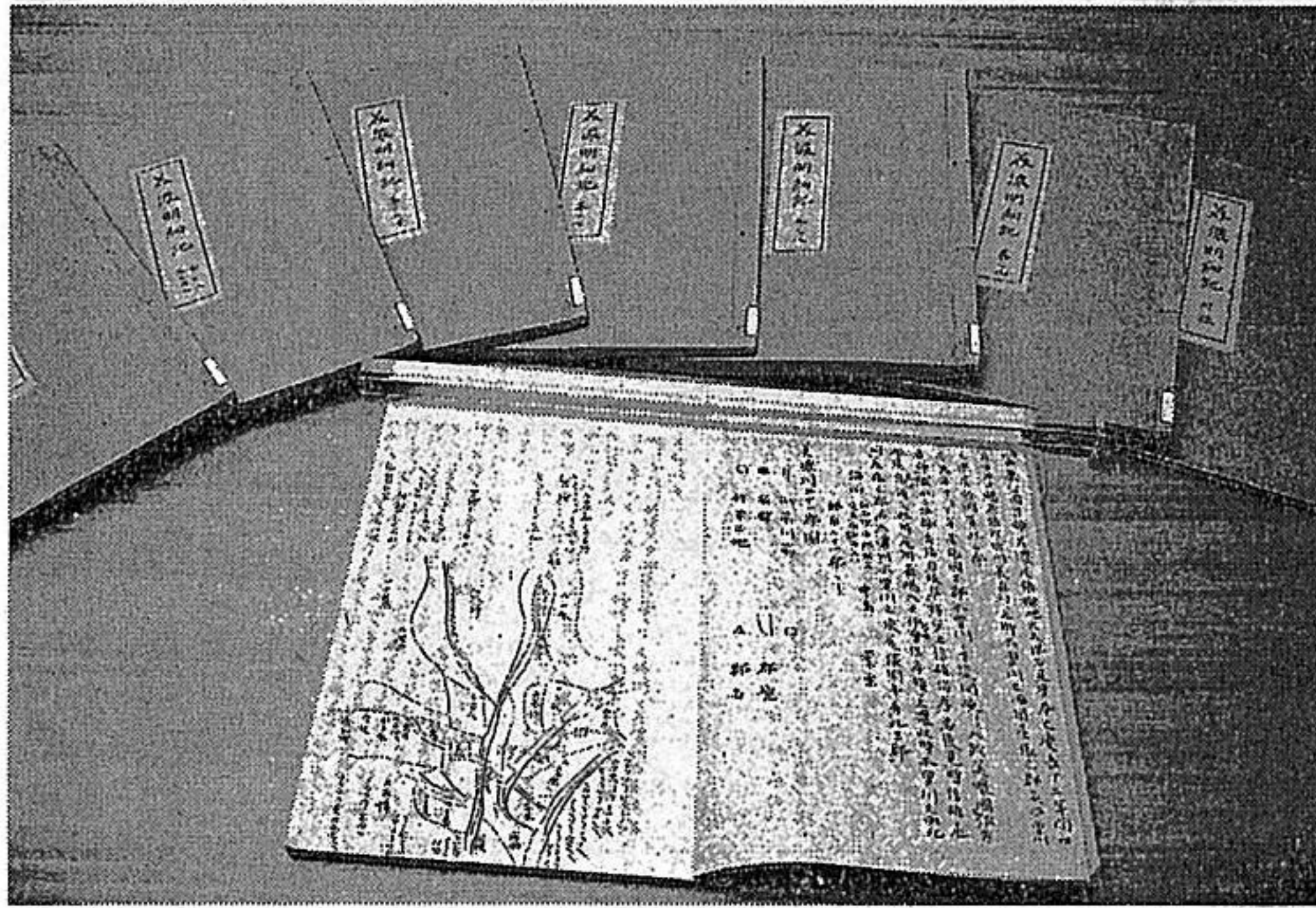
こんな情報<sup>①</sup>が待っている

その中で本書が成立したのは、残されている写本から、江戸時代も半ばを過ぎた一七三八(元文三)年伊東実臣によるとみなされている。

当初は美濃国の枕詞とばかりだった「百茎根」ももくきね」という題で

れ十三巻となったものがある。全体を二十四項目に分け、テーマごとに美濃全域を網羅する内容。美濃の山川から温泉や神社、土岐氏や斎藤氏、織田氏など美濃ゆかりの氏族の系図、古城やその城主に

## 美濃明細記 美濃全域を網羅した地誌



美濃国全体を視野に編まれた最初の地誌「美濃明細記」

ついて、また各地の名所で詠まれた和歌や特産品に至るまで、幅広い記録には目をみはらされる。一九二九(昭和四)年に岐阜史談会から謄写版による翻刻が出された。三二年には県内出版社の

一信社より、二種類の写本がまとめられて活字に翻刻されたものが、同じく美濃の地誌である「美濃雑事記」と合本となつて出版されている。

「美濃雑事記」は文化十(天保年間一八〇四一四四年)に間宮宗好によって編まれた。「美濃国雑事記」などの別称もある。関ヶ原合戦について詳しい記録のあることが特徴で、特に合戦の前哨戦で東軍が劣勢だったことが記されている点などは、当時の記録としては珍しいとされている。

この一信社活字版は一九六九年に大衆書房によって復刻され、現在も郷土研究必携の書として利用されている。

BOOK REVIEW